

早期米 中干しから穂肥管理技術情報

～稲作で最も重要な管理“中干し”を徹底し高品質・高収量を目指す！！～

1. 生育概況

本年は田植後の気温は概ね平年並みで（5月以降はやや低温）、日照時間は十分確保できた。4月25日以降植えは活着後の生育は順調となり、生育速度は平年並みとなっている。

今後、稲作において重要な管理である中干しの時期となってくるので、生育量を良く確認し、分けつが確保できたら速やかに中干しの実施を徹底する！！

2. 中干し前後管理

(1) 中干しをしていないほ場で高品質・高収量は目指せない！中干しには過剰分けつの抑制、土中の有害物質を抑制、余分な窒素を切り穂肥が適切に出来るようにする、乾く事で根量が多くなるとともに収穫直前まで走り水が出来る等、様々な効果がある。中干しの効果を十分に理解し、必ず中干しを実施する！天候に左右されるので、実施できる時に行う！！

(2) 強い稲、籾の充実を良くするため（収量増加）にケイ酸加里を散布！！

・基肥施用していない圃場は、中干し直前にケイ酸加里を10a当り30kgを施用する。

(3) 中干し時期、方法

- ・1株分けつ本数が平均16～18本になったら開始する。（葉が2枚出ていれば1本）
- ・時期は田植え時期で変わってきますが6月中旬頃に、田植え後40日を目安に行う。
- ・早期米の中干しは、梅雨時期と重なる為、排水の栓を抜くなど工夫が重要。

(注)1・白乾はさせない（軽くヒビ割れる程度。乾けば中干し途中で走り水をする）

3. 穂肥（必ず2回に分けて）

穂肥は、稔りの秋に向けて秋落ちをしないよう養分を補給する。しかし、やり方によっては穂長、屑米、草丈（倒伏性）、葉の長さ、捻実、病害虫等、また、収量にも影響しますので下記通り実施をする。

(1) 穂肥1回目の時期は、幼穂長が2mm～3mmを目安とする。（6月下旬頃）

(2) 10a当り1回目20kgと2回目10～15kg（1回目施用後7日目頃が2回目の時期）

(注1) 生育具合で加減する。過繁茂は、倒伏、病害虫に注意

(注2) 葉色が濃い田圃は、7月上旬に色直しを行う。（葉色4.0基準）

(注3) 基肥一発肥料の場合でも生育ムラがあれば、7月上旬に色直しをする。

4. 穂肥散布時の水管理

・穂肥散布時の水は肥料が溶ける（手たき水）程度あればいい、その間は根張りを良くするため間断灌水を行う。

※各作業後は、栽培管理帳に必ず記入しましょう。

ご不明な点がございましたら、農畜産課（092-327-3912）までご連絡ください。